
おはようとおやすみの中間

山口春

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おはようとおやすみの中間

【Nコード】

N9123G

【作者名】

山口春

【あらすじ】

なんでもない日曜日の、なんでもない会話の、なんでもない受け答え。昨日もそんな話しなかったっけ？みたいな、そんな話。

僕は随分と意地悪な性格だから、その日もふと困った彼女の顔を見たくてこんなことを聞いてみた。

「ねえ、もし僕が出かけたとするよね。何も無い、ただの休みの日。あなたはまだベッドでごろごろしててさ、僕が急にすくつと立ち上がるとおもむろに普段着ないようなきちんとした格好に着替えだすんだ。あなたは目をぼんやりと開けながら僕に言うんだよ、どこに行くの？って。そうすると僕は別に、なんて言う。きつとあなたをびっくりさせる何かを考えてるんだと思うんだ。言っちゃうと魔法が解けちゃうような、そんな何か。あなたはきつと喜ぶはずだよ。そんな何かね。あなたは僕の性格をよく分かっているから、それ以上余計なことを聞いたりはしない。そう、っていつて、きつとまた枕にぼふつと頭を突っ込むんだと思う。僕はそんなあなたに感謝しながら、いそいそと出かける準備を続けるんだ。そしていよいよ、着替え終わって荷物の確認も済んだ頃、あなたは僕にポツリと言うんだ。気をつけてねって。僕は大丈夫、そんな遠くまで行かないから、とか曖昧に流して、それから先の、ちよつと未来のあなたが喜ぶ顔を想像してニヤニヤしたりする。そして僕はふらつと外に出る。

で、そこでなにを勘違いしたのか分からない、歩道に猛スピードで突っ込んでくる車に僕は轢かれる。それはもう見事に。轢かれたという事実が認識できなくても何か異常があったことくらいはすぐに分かるような勢いと音が辺りに響く。車のブレーキが地面とタイヤを削る。僕は車に吹き飛ばされて、景気のいい音を立てて地面に叩きつけられると、その上に止まりきれなかった車が覆いかぶさってくる。僕は意識のないまま地面を何メートルか引きずられ、車の下を抜けられるほど薄く摩り下ろされた後、やっと開放される。そこ

にはもう僕はいなくて、地面に赤い血を撒き散らした、生きたたんぱく質だけが転がっている。

あなたはなんだか嫌な予感がして外に飛び出してくるんだけど、当然そうすると、轢かれた僕を見るわけだ。僕というか、僕のようなものね。あなたは叫び声をあげるかもしれない。もしくはあまりの現実感のなさにそこにあるものがなになのか分からなくて何もできないかもしれない。

異音から数十秒後、車から人が降りてくる。当然車だって無傷じゃない。何か大きな質量がぶつかったことがすぐ分かるんだよ、バンパーが大きくへこんでいる。運転手も少し怪我をしている。鞭打ちの少しひどいやつだ。きつとシートベルトなんてしていなかったんだろう、エアバッグのおかげで原形をとどめる彼の身体は随分と軋んで、錆びた針金のような。で、そこにいるあなたを見て、彼は瞬間逃げなきや、と思う。自分のやってしまったことくらいはわかっている。轢いた人間がもう助からないような身体をしていることも、すでに息すらしていないことも、救急車ではなく、警察を呼ぶ方が賢明であることも、全て分かっている。でも、彼は逃げたいと思う。これはきつと夢なんだ、僕がこんなことに巻き込まれるはずない。だから、きつと夢なんだ、なんて考えている。そして、おそろおそろ立ち尽くしているあなたを見る。あなたの目を見る。

あなたは視線を一切僕から離していなかったけれど、その瞬間、自分を見つめる視線に気づきふと視線を上げる。彼と目が合う。そして、あなたは何て言う？

この、あくまでも仮の、どこまでもくだらない、そして粗野なifを、彼女はぼんやりとコーヒを飲みながら聞いていた。時折眉間に皺がよっていたけれど、それは僕のスプラッタな表現が嫌だったからではなく、単にコーヒーが思ったより濃かったからだと思う。

「この質問で、意味ある？」

「まあ、人生何事も予習は大事だ、とか、そんな感じかな？」

なるほどね、と彼女はコーヒを飲み干しながら言う。なるほどね、といったと思うけれど、実際僕にはマルボロね、としか聞こえなかったのだから、ただ単に、自分は今からタバコを吸う、という意味表示をしただけなのかもしれない。

「何でこんなこと思いついたの？」

「忌野清志郎が死んだから」

「彼は病気でしょ？」

「僕は事故かもしれない。結局死因なんて何でもいいんだ。別に名探偵が事件を推理しに来る様な難解な事件だっていい。そんな話を思いついたりはいしないけどね」

「つまりあなたは私に、大切な人間が突然死んだら、どういった行動、発言をするのか先に伝えておいてくれるって言っているわけね」
まあ、大まかに言えば、と言って僕はタバコに火をつけた。なんだが責められているような気分になってきた。くだらない話を唐突に繰り出した後はいつもこんな気分になる。じゃあやめればいいのに、と思う自分もいるけれど、結局性格の悪さが先にたってしまう。煙がもやもやと机の上を走る。

「分かった。じゃあ言うね。何も言わないよ」

何も言わない、と言うのが僕の話に対してなのか、その状況の自分に対してなのかよく分からなかったけれど、どっちの話？と聞くと彼女が本当にもう何も言ってくれなくなることが分かっていたから、僕は彼女が僕の話に乗ってくれていると仮定して話を続けることにした。

「なんで？」

「あなたは車に轢かれないから」

「いや、轢かれるとして」

「轢かれないから」

ひかれ、ともう一度言いかけたところで、

「あなたはまず歩かないし。移動は車でしょ？」

と言われたので、設定を玄関先に車が突っ込んできたことにした。

「随分勝手だね。まあ、どうせ妄想だからなんでもいいけど。それでも轢かれません」

「なぜ？」

「先に玄関を出るのはいつも私だから」

「その日はたまたま」

「ありえませんが。私のほうが準備が早いから」

彼女はもう一杯コーヒーを飲もうと立ち上がった。時刻は11時12分。午前中と呼ぶには随分と時間が経ってしまった。

「僕が轢かれた話をしてよ」

「だって、どう考えても轢かれないもの」

じゃあ、あなたが先に轢かれるってこと？と、僕は当然の質問をした。とはいえ、そもそも質問は自分が作ったわけだから随分と変な流れになってしまったものだ。

「いいえ、轢かれません」

「なぜ？」

「私は車に轢かれないから」

そう言つて、彼女は二人分のコーヒーを机に置いた。僕はタバコを片手にそれに口をつける。思ったとおり、というかやはり、それは随分と濃かった。

「わからないでしょ？人生はなにが起きるか分からないし」

「そうだね、でも私は轢かれません。そう決まっています」

そうかもね、と僕は言った。本当にそんな気がしてきた。彼女が言うからには、仮の話であつたとしても彼女は闘牛士のように車をひらりと避けてしまうのだろう。

「決まってるんだ」

「そう、だからあなたも轢かれません。わかった？」

「わかった」

こうして僕の空想はあっさりと終わる。そうか、轢かれないからそんなことを考えるだけ無駄だったな、なんて思う。

「で、あなたならなんて言うの？」

なんて彼女が聞いてきたから僕はこう答えた。

「轢かれません。そんなこと考えたら悲しいでしょ？」

なんだ、分かっているんじゃない、と彼女が言ったところで、目覚まし時計が時間を勘違いしたのかけたたましく鳴った。

「あれ？何でこんな時間に？」

「さて、出かけましょう。今日は一緒に買い物に行くんでしょう？忘れてると思って目覚ましかけておいたの。あなたが準備しないと出発できないからね」

そういえば、何て言えやしないから、僕は分かったよとだけ言って最近お気に入りのジーンズに足を通す。そして答えの分かっている質問をもう一度だけした。

「玄関の扉を開けたらさ・・・」

「しつこい！！」

どつりで、彼女が朝から化粧をしているなんておかしいと思ったんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9123g/>

おはようとおやすみの中間

2010年11月12日19時56分発行